

2023年5月14日（復活節第6主日、A年）

牧師メッセージ

「わたしにつながっていなさい」

（ヨハネによる福音書 15:1-8）

司祭ヨセフ太田信三

東京聖テモテ教会のぶどうの木を眺めていると（東京諸聖徒教会のキウイもそうです）、もとの幹から自然と枝分かれをしていて、どこからがもとの幹で、どこからが枝なのか、はっきり分かりません。たしかに枝は幹から出るのですが、それらが一体となって「木」なのです。ぶどうが身近なパレスチナの人々にとっては、主イエスの今日の言葉は、まさにそのようなぶどうの木のイメージと共に伝わったことでしょう。つまり、一体の幹と枝の全体をさして、主イエスは「わたしはぶどうの木である、あなたがたはその枝である」と言われたのです。たしかに、幹は主イエスで、枝は弟子たちですが、それらは分かちがたく一体で、主イエスが弟子たちの中にいて、弟子たちも主イエスの中にいる、ということです。互いに切り分けられるものではなく、弟子たちにもイエスさまがおられるし、主イエスにも弟子たちがいる、そういう相互に交わり合い、関わり合い、存在し合う。それこそが、主がわたしたちのうちに留まり、わたしたちが主イエスに留まっている、ということです。

「あなたがたがわたしにつながっており、わたしの言葉があなたがたの内にいつもあるならば」と7節にある通り、主イエスに留まるとは、主イエスの言葉、み言葉に留まる、ということです。「主イエスが弟子たちの内にいる」とは、「主イエスの言葉が弟子たちの内にある」、ということなのです。「はじめに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」と始まるように、ヨハネ福音書において、主イエスは神の言であり、主イエスの言葉は子なる神としての主イエスそのものです。ですから、主イエスの言葉、み言葉に留まるなら、わたしたちは主イエスに留まることになり、主イエスと神との交わりに迎えられますのです。それは、み言葉を眺めて、理解しようとする事では決してありません。ぶどうの木の枝と幹のように、み言葉がわたしたちの内にあり、わたしたち自身の存在もまたみ言葉の内に溶け出していく、み言葉と生身の交わりをする、ということです。先週の福音で、ご自分が天に昇るのは、わたしたちのために「住むところ」を用意しに行くためだ、と主イエスは言われました。この「住むところ」という単語の語源を探っていくと、「住むところ」とは、「わたしたちが本来のあり方を失うことのないところ」という意味を見出すことができます。その場所こそ、主イエスと相互に分かちがたく共にいる場所、天の国です。主イエスは、そこにわたしたちを迎え入れるために、天に昇られるのです。しかしその場所は、死んでから迎えられるところではないことが、今日の福音から分かります。今、主イエスに留まるなら、今、わたしたちも「住むところ」に迎えられますのです。